

～旧約聖書を読んで感じること～ (44) ナオミとルツ (1)



Thomas Matthews Rooke, 1876

混乱と暴力に満ちた混沌とした士師記のすぐ後に、まったく雰囲気異なるホームドラマのような、穏やかな物語が展開します。主人公はもちろん女です。飢饉のために故郷ベツレヘムからモアブの地へ逃れたエリメレクの家族が、すべての男手を失いました。残されたのは、年老いた妻ナオミと、二人の亡き息子の嫁であるオルパとルツでした。その二人の嫁も子を授からないまま、寡婦になっていたのです。ナオミは絶望してしまいました。住み慣れた地も空しく感じられ、帰国する決心を固め、嫁たちには実家に帰るように言いました。

「自分の里に帰りなさい。あなたたちは死んだ息子にもわたしにもよく尽くしてくれた。どうか主がそれに報い、あなたたちに慈しみを垂れてくださいますように。どうか主がそれぞれに新しい嫁ぎ先を与え、あなたたちが安らぎを得られますように。」(ルツ 1:8-9)

二人の嫁は悲しみ、ナオミと共に行くと言い張りました。ナオミはもはや

このままでは、子を授かる希望がないと言って、二人を去らせようとしています。けれども、ルツはナオミの言うことを聞きませんでした。

「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。わたしは、あなたの行かれる所に行き、お泊まりになる所に泊まります。あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神。あなたの亡くなる所でわたしも死に、そこに葬られたいのです。死んでお別れするのならともかく、そのほかのことであなたを離れるようなことをしたなら、主よ、どうかわたしを幾重にも罰してください。」(ルツ 1:17-18)

ルツにとってナオミへの愛は揺るがないものでした。その根本にあったものはナオミが信じる神を、自分も信じているということでした。ルツの言葉を受け入れて、ナオミはルツと共に故郷、ベツレヘムに戻りました。うつろなナオミを残し、ルツはすぐにさっそく早朝から麦畑に落穂ひろいに出かけ、家計を支える行動を始めました。麦畑の主は親戚筋に当たるボアズでした。彼はルツの懸命に働く姿に目を留め、ルツが姑に尽くしていること、見知らぬ土地から来たことなどを聞いて、特別に便宜を図るように僕たちに指示を与え、親切に接したのです。それを知ったナオミはルツに言います。

「わたしの娘よ、わたしはあなたが幸せになる落ち着き先を探してきました。」(ルツ 3:1) 夫の嗣業の土地を譲渡させるために、ボアズにルツを与え、ボアズの家族になる計画をめぐらし、ルツに指示を与えました。



Thomas Matthews Rooke, 1876

それは収穫の日に麦打ち場で眠るボアズの床にルツを送り込むことでした。ルツに体を洗わせ、香油を塗り、肩掛けで身を隠していくように命じました。朝になって、ルツが共に寝床にいることを知ったボアズは、驚きましたが、すぐに事情を了解し、万事誤解のないよう算段しました。嗣業の土地を譲渡される権利と同時にルツに子を授ける義務も負うと言って、ボアズ以上に責任を持つ人物と、公明正大に話し合いを行い、ボアズがそれを引き受けることに決めました。ルツはボアズと結ばれ、オベドという男児を出産します。ルツの幸せを願っていたナオミはボアズの愛情を知り、イスラエルの嗣業の土地を守る定め、一族との婚姻関係を利用する定めを賢く利用したのです。孤独のはずだったナオミは

「その子はあなたの魂を生き返らせる者となり、老後の支えとなるでしょう。あなたを愛する嫁、七人の息子にもまさるあの嫁がその子を産んだのですから。」(ルツ 4:15)と、土地の女たちに賛嘆の言葉を貰い、幸せをかみしめました。